

[講演記録] 1498年明応東海地震の津波被害と中世安濃津の被災

新潟大学人文学部* 矢田俊文

The damages by tsunami in Meiou-Toukai earthquake in 1498 and the suffering in Anotsu in the Middle Ages

The college of humanities, University of Niigata

Toshifumi YATA

Ikarashinino-cho 8050, Niigata City, Niigata Prefecture, 950-2102 Japan

Because of Meiou-toukai earthquake, tsunami brought great damages to Wadoura in Kii, Hashimoto in Toutoumi and Anotsu in Ise. So the residents in these areas had to migrate to other places. These port towns faced rivers or lagoons near the sea. They didn't face the sea. Because these port towns in these areas, they were badly damaged by tsunami caused by these earthquakes.

§1. はじめに

本稿は、中世の港湾都市のあり方を考える中で、明応地震とその被害の関係を考えるものである。

明応七年(1498)八月二十五日、地震津波が房総半島から紀伊半島にかけての沿岸に大きな被害を与えた。とくに、紀伊の和田浦(和歌山市)、伊勢の安濃津(三重県津市)、遠江の橋本(静岡県新居町)などの港湾都市が大きな被害にあった。港湾都市安濃津は明応の地震津波で潰れた。大永二年(1522)八月、この地を訪れた連歌師宗長は、そのありさまについて、「此津、十余年以来荒野となりて、四・五千間の家・堂塔あとのみ、浅茅・よもぎが杣、まことに鶏犬にはみえず、鳴鴉だに稀なり」(「宗長手記・上」と記している。被害を受けた和田浦・安濃津・橋本の住民は移住を余儀なくされた。

なぜ、これらの港湾都市は、移住をせざるをえないほどの壊滅的打撃を受けたのであろうか。それは、地震津波の被害を受けるような地点に立地していたためではなかろうか。

中世の港湾都市として知られる山城国淀津(京都市)・伯耆国橋津(鳥取県羽合町)・越中放生津(富山県新湊市)・越後国岩船(新潟県村上市)などは、川や潟と海を結ぶ水路沿いに立地している。

明応地震で被害をうけた紀伊国和田浦・遠江国橋本・伊勢国安濃津はどのような地点に所在した港湾都市だったのであろうか。

§2. 紀伊国和田浦と明応地震

はじめに紀伊国和田浦から見てみよう。現在の紀ノ川の河口は図1のように西側に開いている。



* 〒950-2102 新潟県新潟市五十嵐二の町 8050

この河口は明応地震で開いたと推定される。

紀ノ川の流路は、はじめは土入川から和歌川を
通って和歌浦へ注ぐコースであったが、のちに土
入川・水軒川を通して大浦に注ぐコースに変わる。
明応地震以前は、図1に見えるような河口はなく、
松江から雑賀崎につながる砂丘で塞がれていた。

和田浦はどこにあったのか。和田浦には、現在
の土入川から水軒川に流れていく旧紀ノ川の途中、
砂丘の内側の内水面にあった。図1にみるように
和田浦は海には面していない。和田浦は、海には
直接面していない水路にあることがわかる。

この和田浦には、12世紀末の文書から、「坂東
丸」とか「東国丸」という船名をもった船を所持
していた者がいたことがわかる。「坂東丸」「東国
丸」といった船名をもった船は、この和田浦と関
東を行き来した船で、和田の湊はそのような船を
所有していた湊であったと考えられている。

§3. 遠江国橋本と明応地震

次に遠江の橋本を見てみよう。紀ノ川と同様に、
浜名湖も明応地震により、現在と同じ地点に海に
つながる口が開いた。

図2は明応地震以前の浜名湖推定図である。元
の浜名湖は現在とは大きさが違う。図2のアミカ
ケの場所は明応地震以前は陸地であった。それが

明応地震によって現在のような浜名湖の形になっ
たのである。

図2にみえる浜名川は、当時は浜名湖から西側
に抜けて海に出る川であった。現在は砂丘で河口
がふさがれている。この浜名川に沿って橋本とい
う大きな港湾都市があった。

橋本には浜名橋という橋が架かっていた。この
橋は、「日本三代実録」元慶8年(884)9月条に
「浜名橋」と記され、また、「枕草子」の中にも、
「浜名の橋」とみえる。浜名橋は東海道と浜名川
に架かる有名な橋として知られていた。

橋本は、この浜名橋にちなんだ地名で、東海道
の要衝としての宿であった。鎌倉時代には、「遊女」
「あそび」「傀儡」がいたことが知られる。鎌倉期
の「東関紀行」には、「人家岸に連なれり」と表現
され、浜名川の岸に沿って家屋が建ち並んでいた
情景を推定することができる。応永九年(1402)
五月二十六日には、將軍足利義満が橋本・天龍・
大井・富士河・木瀬河の「奉行職」を今川泰範に
安堵して、渡を管理させている。橋本は、太平洋
と浜名湖を結ぶ浜名川と東海道が交差する地点に
開けた港湾都市であった。

明応の地震によって、この橋本は壊滅し、住民
は寺社とともに今切・新居地域に移住した。現在
の新居の町場(図2B)は宝永四年(1707)以後の

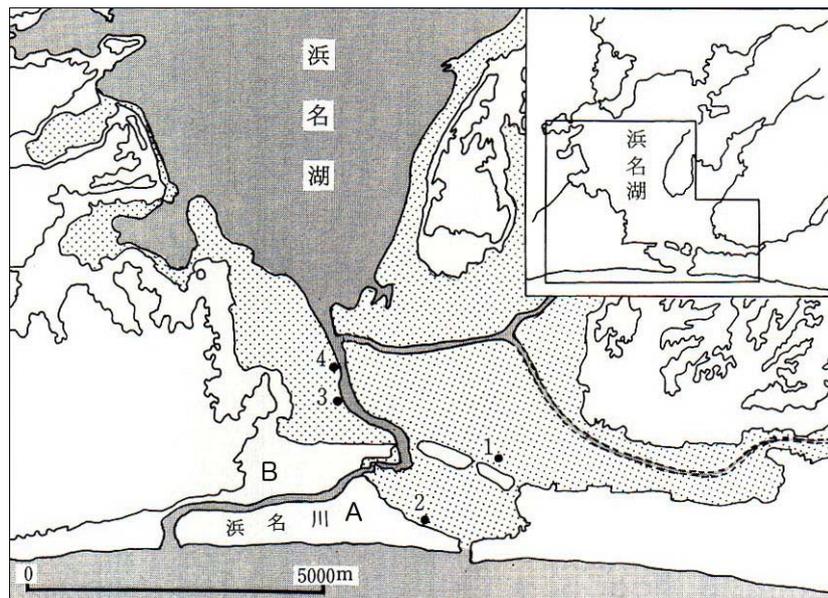


図2 明応地震以前の浜名湖図(矢田, 2002, 一部改変)

1. 弁天島遺跡 2. 新居弁天遺跡 3. ゼゼラ地区遺跡 4. ステモ地区遺跡
A. 元新居 B. 宝永四年後の新居町



図3 明応地震以前の浅羽低地 (矢田, 2003)

もので、16世紀後半の新居は、浜名川と浜名湖が合流する地点の元新居地域 (図2A) にあった。天文二十二年 (1553) には「今切渡」、弘治三年 (1557) には「新居里宿」が文書にみえる。また、永禄五年 (1562) の今川氏真朱印状により、浜名湖水運の拠点としての新居が確認できる。明応地震で壊滅した橋本の人々は新居・今切に移転し、16世紀中ごろまでには復興をとげたと考えられる。

§4. 元島遺跡の湊と明応地震

宝永四年 (1707) の宝永地震によって陸地が2メートル隆起する以前、また、明応地震 (1498年) 以前の浅羽低地は、鵜湖が広がり、遠州灘の砂丘の内側に湊がある空間が広がっていた (図3)。旧東海道の南側は広大な潟の世界であった。

清ヶ谷古窯群 (静岡県大須賀町) の窯から焼かれた土器は、鵜湖をとおって旧東海道近くにある佐野郡家との一部と推定されている坂尻遺跡 (静岡県袋井市) に運ばれた。また、清ヶ谷古窯群で焼かれた瓦は、同じく鵜湖や川を利用して遠江見附の国分寺 (静岡県磐田市) に供給されている。

このような内水面交通の発達した浅羽低地の海拔2メートルの地点に、湊の遺跡と推定される元島遺跡 (静岡県福田町) がある。元島遺跡には15

世紀代の川船の木製碇が出土し、倉庫群と推定される地区には船入りがあったので、この遺跡の地域が湊の機能をもった地域であることが明らかである。元島遺跡は浅羽湊と密接に関連する湊であり、湊の物資は浅羽湊から川船で原野谷川を進み元島遺跡にあるクリークを通して太田川に抜け見附に運ばれた。また、袋井へも、浅羽湊・元島遺跡から運ばれた。

ところが、浅羽湊、元島遺跡の湊も明応地震で大きな被害を受けた。物資流通の拠点である浅羽湊と比較すれば、元島遺跡の湊の被害は少なかったものの、浅羽湊が大被害を受けたため、その影響が元島遺跡にも及んだ。16世紀になると、船入りの遺構はなくなり倉庫群も消えた。元島遺跡の湊は海に面した湊ではなく、旧東海道の南側に広がる潟の世界にあった。

§5. 伊勢国安濃津と明応地震

最後に安濃津をみてみよう。安濃津も明応の地震で壊滅した。図4に安濃津遺跡群が見えるが、これが中世の安濃津の跡の一部と考えられている遺跡である。この遺跡は砂堆の上ののっているが、図4をみると、そのすぐ南には後背湿地が広がっていることがわかる。明応地震以前、この後背湿

地は水路であったと思われる。南北に延びる内水面があり、その水面に沿って港湾都市安濃津が開けていたと考えられる。

「耕雲紀行」応永二十五年（1418）条には、「その夜は、あの津につきぬ。念仏の導場にやとる。こゝハ、この国のうちの一都会にて、封疆もひろく、家のかすもおほくて、いとミところあり、当日の守護土岐の世やすとかや、御まうけなといとなむ」とあり、15世紀前半の安濃津は念仏道場が存在し、家数の多い地域であった。安濃津は、中世は伊勢神宮の御厨で、年貢は橋賃であった。安濃津は橋で得た収入を年貢にする地域であり湊であった。

このような安濃津が壊滅し、人々は現在の津市の中心地に移った。現在の津は岩田川の北側にある。この岩田川の北側に、藤堂高虎の城、津城と城下町があった。近世津町は安濃津の人たちが1498年の明応地震の被害に遭って移住して新しい町なのである。そして、その後、その町に城下町がつくられた。

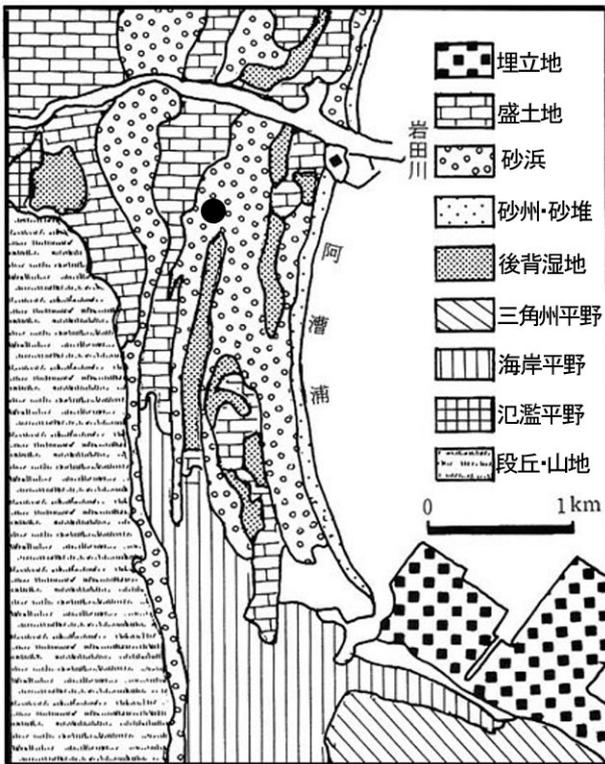


図4 津東部の地形分類図 ●安濃津遺跡群 (矢田, 2003)

§6. おわりに

以上見てきたように、明応地震で被害をうけた紀伊国和田浦・遠江国橋本・元島遺跡の湊・伊勢国安濃津は、川や潟と海を結ぶ水路沿いに開けた港湾都市であった。このような地点に中世の湊があった。このような海に近い水路に湊があったため、住民がこぞって移住をせざるを得ないほどの地震津波による大きな被害を被ったのである。

文 献

- 伊藤裕偉, 1997, 安濃津, 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉, 2000, 中世安濃津の交通路と物流, 三鬼清一郎編『織豊期の政治構造』吉川弘文館
- 加藤理文, 1999, 元島遺跡1 (遺物・考察編1—中世—), 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 日下雅義, 1980, 歴史時代の地形環境, 古今書院
- 矢田俊文, 2002, 日本中世戦国期の地域と民衆, 清文堂
- 矢田俊文, 2003, 戦禍・災害と人々の生活, 有光友学編『戦国の地域国家』(日本の時代史12) 吉川弘文館